

幻 想 文 学 空 間

煙は、出たまま、
涙々と物憂げに、
その場に立ちこめて、
なおもまた
他の幻想へと

誘うのだった
大都会の屋根の上に
漂う熱気、
消えて散ることのない
不透明な煙

アスファルト道路の
上に垂れ込める
雨風の軌、
記憶の伊い霧でも
なければ乾いた

透明さでもなくて、
都市の固い表皮を形
づくっている燃えつきた
生活の火照り
もはや濡れようとも

しなない生命の物質に
膨れあかった
一箇のスポンジ、
運動の幻想のなかに
石灰化した存在を

押しとどめている
過去現在未来の氾濫、
これを旅の終りに
お前はいつも
見出すのだった

世紀転換期のベルリン、ワイマール



今泉文子

幻
誘うのだった
大都会の屋根の上に
漂う熱気、
消えて散ることのない
不透明な煙、

想
誘うのだった
大都会の屋根の上に
漂う熱気、
消えて散ることのない
不透明な煙、

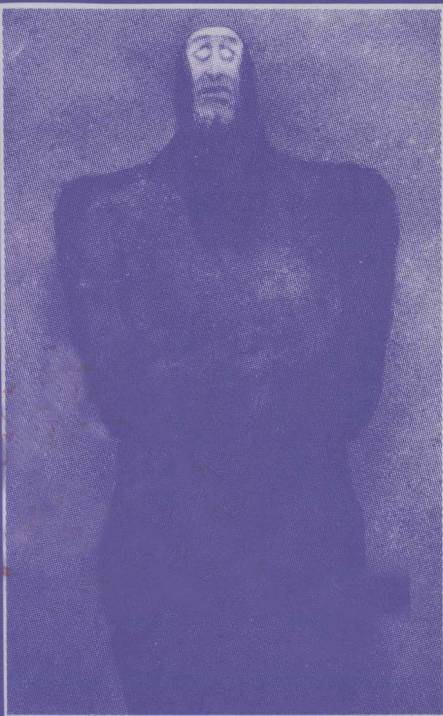
文
アスファルト道路の
上に垂れ込める
腐臭の帷
記憶の薄い霧でも
なければ乾いた

学
透明さでもなくて、
都市の固い表皮を形
づくっている燃えつきた
生活の火照り
もはや流れようとも

空
しない生命の物質に
膨れあがった
一箇のスポンジ、
運動の幻想のなかに
石灰化した存在を

間
押しとどめている
過去現在未来の氾濫
これを旅の終りに
お前はいつも
見出すのだった、

世紀転換期のベルリン・ウィーン・プラハ



ありな書房

今泉文子 (いまいずみ ふみこ)

1945年、浦和に生まれる。1974年、東京大学大学院独語独文学博士課程修了。現在、立正大学教授。

主 著 『ドイツ・オーストリア』講談社 (共著)

主訳書 『ノヴァーリス全集』牧神社 (共訳)
『ノヴァーリス』(国書刊行会) (共訳)
『テーク』(国書刊行会) (共訳)
『トーマス・ミュンツァー』(国文社) (共訳)
『テキスト詩学の原理』(勁草書房) (共訳)

幻想文学空間——世紀転換期のベルリン・ウィーン・プラハ

1985年12月15日 第一版第一刷発行

著 者 今泉文子

発行者 松村 豊

発行所 株式会社 ありな書房

東京都文京区本郷1-5-17 三洋ビル18号 電話 815-4604 振替東京 3-61373

印 刷 株式会社 厚德社

製 本 株式会社 東和製本

装 幀 工藤強勝

定価 1,800円

1985 ©

幻想文学空間

—世紀転換期のベルリン・ウィーン・プラハ—

目次

I 都市と幻想文学

「見える都市」から「見えない都市」へ 都市の光と闇 中欧幻想派
ドイツ・ロマン派と都市 世紀転換期のベルリン・ウィーン・プラハ
幻想文学への新たな眼差し

7

II ベルリン

ベルリンの世紀末 モデルニテートの追求——ニーチェと分離派
ベルリン・ボヘミアン——〈黒い仔豚亭〉 幻想文学とは？
幻想都市建設——パウエル・シェーアバルト
幻想文学ブーム——H・H・エーヴェルスを中心に
大都市という魔神——表現主義者たちのベルリン

37

III ウィーン

黄昏のウィーン 室内 カフェ文士たち
夢幻劇——フーゴー・フォン・ホーフマンスタール シュニッツラーの怪奇劇
「神経症の歴史」——ウィーンの同化ユダヤ人 「白い異郷者」——ゲオルク・トラークル

101

IV プラハ

グスタフ・マイリンク——『ゴーレム』

闇の都市——「今、なぜ、プラハか？」 ゴーレムの都市 小説『ゴーレム』の位相

意匠としての〈黒いロマン主義〉 「ひそかに鼓動する都会」 現代幻想文学とミリュール

心的過程の投影としての『ゴーレム』 闇の中の光——ヘルマフロディート幻想

アルフレート・クビーン『裏面』ある幻想的な物語

『ゴーレム』と『裏面』 反ユートピア小説

V 幻想文学を生きる

引用文献・参照文献

あとがき

幻想文学空間——世紀転換期のベルリン・ウィーン・プラハ

I
都市と幻想文学



「もつとも意外な夢とは、すなわち一箇の判じ絵——欲望を、さもなくばその裏返しの、恐怖を隠しているものでございます。都市もまた夢と同様、欲望と恐怖で築かれております……」

「朕には欲望も恐怖もないぞ」と、汗はきっぱりと言いきった。

「朕の夢はただ精神か、さもなくば偶然の作り出したものなのだ」。「都市もまた、精神か偶然の産物であると信じられております。しかしそのどちらも、城壁を支えてゆくには十分でございません。都市から得られる欲びは、その七不思議、七十七不思議などではございません、ただわれわれの間に寄せるその答でございます」。

(イタロ・カルヴィーノ『見えない都市』米川良夫訳)

都市論のラディクスを最も美しく示しているイタロ・カルヴィーノの『見えない都市』は、マルコ・ポーロがたどった西域の都市を幻視して、都市というものが実はカオスそのものであることをくり返し伝えている。都市は欲望と恐怖で築かれている、と彼は言う。人びとの欲望と恐怖は、共同体社会にあっては、周期的にくり返される儀礼の中で解放されることによって、より高い秩序、すなわち宇宙的秩序のもとに巧みに組み入れられていた。それに対し、近代都市は、欲望と恐怖を世俗的秩序のもとにおおい隠そうとしてきた。カオスの上に築かれながらそれを一方的に隠蔽しようとする都市、欲望と恐怖の儀礼的開放を欠いた都市は、その結果、さまざまな矛盾を露呈していく。

イワノフとロトマンらの『文化の記号論的研究のためのテーゼ』は、文化を閉じた秩序化された内部領域とみなし、秩序化されておらず文化的に支配されていない外部領域（カオス）との対立の中におきなおす。そして文化を「文化領域からカオスへ、カオスから文化領域への相互移行、相互突

入」という関係においてとらえることをうながしている。今、都市を考える場合、われわれもまた都市が秩序と非秩序（カオス）のせめぎあいの中にこそ成立しているということを認識しなおすべきだろう。

近代ヨーロッパ文明が未曾有の危機を迎えようとしていた世紀転換期（一九世紀末から第一次大戦まで）に、幻想文学がロマン主義以来の圧倒的な甦りをみせた。ヨーロッパ近代文明は文字どおりの「光シエクル・デ・ルミエールの世紀」以来、啓蒙フロソフィ・デルミエール主義、合理主義を旗印として邁進し、カオスを、闇の部分を一方的に抑圧してきた。その果てにやがて、世俗的秩序によりおおい隠されていたカオス、闇の部分がある部分を侵犯しだす。そしてある瞬間、闇やカオスに根差すものが一挙に噴出して来る。秩序化されたヨーロッパ文明に対立するとみなされるさまざまなもの、すなわち、アジアやアフリカ、古代の神話、宗教が思い返され、未開人や幼児や精神病者による作品、そしてオカルティズムが呼び出される。そしてこうしたものと深くかかわって幻想文学もまた登場してくる。幻想文学が一文明の危機を前にして栄えるということは、都市と幻想文学にとって偶然ではない。都市化が進むということは、人間がいよいよ宇宙的秩序コスモスから離れてカオスの中におちいることを意味する。カオス、あるいは闇にこそ立脚する幻想文学は、カオスとしての都市の姿を、人間の欲望と恐怖を最もよく映し出すものではないか？ だとすれば、幻想文学を媒介にして都市をながめることは、世界的な都市化のただ中にあって危機に立たされている「われわれの今」ととっても一つの示唆を与えてくれるにちがいない。

われわれの欲望と恐怖とは何か？ われわれはそれにどう対処すべきなのか？ 幻想文学は都市に

隠された欲望と恐怖をどのように暴き出しているか？ 幻想文学が流行するという事実をどう受けとめるべきなのか？——こうした問題を具体的にみつめなおそうとすると、われわれの視線の中に世紀転換期の三つの都市、ベルリン、ウィーン、プラハが浮上してくる。これら中欧の三都市は、一九世紀後半からひとしく急速な都市化を経験し、きたるべき戦争を前にして危うく存立していた。しかし一方、その地理的・歴史的背景の相違から、それぞれに独特の位相を占めてもいた。先に都市が秩序とカオスのせめぎあいの中に成立すると言ったが、今、これを光と闇のせめぎあいと言いかえてみると、これらの都市はそれぞれ次のように言うことができるだろう。すなわち、ベルリンは光まばゆい昼の都市、ウィーンは光が傾き闇が侵犯しだした黄昏の都市、プラハはそのままにしてすでに闇の都市である、と。さて、世紀転換期のベルリン、ウィーン、プラハを光と闇の相互侵犯関係の中でとらえなおし、これらが幻想文学と夢幻的文学とどのようにかかわり、また、その中で具体的にどんな姿として映し出されているか、そして、きたるべき危機に対し何を告知しようとしていたのかを以下にみていくつもりである。その際、導きの糸となるのはカルヴィーノの『見えない都市』である。

「見える都市」から「見えない都市」へ

歴史家のモムゼンには、古代アテネの市街図を刻明に描くことはできても、一九世紀末のベルリンでは大学から家への道がわからなかった、というエピソードがある。これはミルチア・エリアーデが

一九七〇年にシカゴのロヨラ大学で講義をした際に枕においたものだが、これだけ取り出せば、お定まりの Fachriot (専門バカ) というおかしいような哀しいような話にすぎない。しかしエリアーデは、いかにも彼らしい注釈をつけた。モムゼンにとつての「實在の世界」、「関係をもち、意味をもった唯一の世界」は古代ギリシア・ローマの世界であつたという。「大多数の創造的な学者がそうであるように、彼もおそらく二つの世界に住んでいたのである。彼がその理解に一生を捧げた世界、すなわち未開人の宇宙化され、それゆえ聖化された世界に多少とも比せられる形式と価値をもった世界と、ハイデガー流に言えば、彼がそこへ〈投企〉された日常の〈俗なる〉世界とである。しかし晩年を迎えると、モムゼンが、現代ベルリンという俗にして無意味な空間、彼にとつて意味を欠き、究極的に混沌とした空間から離脱していたのは明らかである。これをベルリンという俗なる空間に関する記憶喪失症と言えるとすれば、この記憶喪失症は、モムゼンの実存的世界、すなわち古代ギリシア・ローマの世界に関わるすべてのものへの途方もないアナムネシスによつて補償されていた、とも言わねばならない。晩年のモムゼンは祖型の世界に生きていたのである」(楠正弘・池上良正訳)。

エリアーデは、ここから「人は〈混沌〉^{カオス}の中には生きられない」として、宇宙に聖性に結びつく都市創設というおなじみの論議を展開していくのだが、今、「都市への眼差し」ということを考えると、この解釈にはいささか問題があると思われる。それは、都市論を展開する際の「内部領域」と「外部領域」との関係、そして「見える都市」と「見えない都市」、すなわちモムゼンで言えば、眼前のベルリンと失われた古代都市アテネとのかかわりという問題である。モムゼンにとっては、見える都市

である眼前のベルリンが見えなくなっていて、ギリシア・ローマの見えない都市がリアルに存在していた。というのも、われわれが、失われた都市や見えない都市、あるいは都市の見えない部分に関心をよせるのは、現に自分が組み込まれている都市空間、「俗にして無意味な」空間から離脱するということではなく、むしろ他処なる都市を語ることにより、一旦外部領域に出た眼差しをもって、この無意味に見える空間（内部領域）に再潜入し、そこになんらかの意味と方途とをみいだしたいがためである。たとえば、「一九一一年の二月某日、ヘカフェ・デス・ヴェステンズ」では、ペンフェルト、カール・アインシュタイン、ファン・ホッデイス、ルービナーらが集まって……」といった記述は、ベルリンならベルリンのある時期の文化的状況を具体的に伝えてもくれようが、この精緻なモニタージュを空疎なものにしないためには、二つの空間を往還する眼差しが要求されるのだ。ただし都市論とは、「見える都市」と「見えない都市」との、「内部領域」と「外部領域」との往還の中にこそ成立するものだから。

他処なる空間に潜入することの意味は、もう一度カルヴィーノの言葉を使えばこう言える——
「他処なる場所は負トクにして見せる鏡でございます。旅人は自己のものとなしえなかつた、また今後
もなしうることはない多くのものを発見することによって、おのれの所有するわずかなものを知るの
でございます」。

カルヴィーノの『見えない都市』が出版されたのは一九七二年（邦訳一九七七年）である。その前後から今日に至るまで、さまざまなアプローチによる都市論が輩出した。そしてそれらは詳細な記述に

よってそれぞれに、都市のもつ諸相を伝えてくれた。しかし、それでもなお、現存した都市の痕跡をつぶさにたどる都市論のいくつかよりも、大帝国の支配者たる憂い顔のフビライ汗とひたすらニヒルなマルコの間で語られるこの五五の幻の都市の方が、人間が必然的に造り出さざるをえない都市というもののリアリティを示しているように思える。

もう一度言おう、なんのための精緻な都市論か？ 数かずの都市の物語は、楽しまぬ王侯（＝読者）を慰めるだけのものであつてはならず、あるいは、「自己の属する社会・文化の反省」という安易なきまり文句に収斂するだけのものであつてもならない。さればこそ、偉大なる汗は、いくつもの都市の物語をさえぎって、あらためてマルコに問う――

「それもまた同様にはるばると遠い国から戻つてきながら、申してくれることはただ門先にすわりこんで夕涼みするものか思い浮かべるようなものばかりか？ それならば、そのように旅をしてなんの役に立とうというのか？」

なんの役に立つとはっきり言えるものではない。だからマルコは、ただ想像の中で、あるいはフビライの想像の中で、見知らぬ街並みに迷い込みつつ、おのれの出自の町を「知ることも学んで来ているのだ」と答えてみる。そう、「知る」のではなく、「知ることを学ぶこと」なのだ。そして「知ることを学ぶ」とは、単に知るといふ受動性から逆転した眼差しをもって、対象に新たな意味を付与していこうとする積極的な意志の問題である。その果てに、すなわち、砂に埋もれた都市と、やがて埋もれようとする運命に身を預けたまま存立している危うい都邑と、そしてまた、いまだどこにもないこ